

〈論文〉

イギリスとイタリア

——文学の影響——

加藤芳子

(1) はじめに

イギリスとイタリア。この2つの国は遠くて近い。古来からイギリスには、イタリア（ないしは古代ローマ帝国）の芸術や文学、思想等の影響を強く受けた人々が多い。しかもこれらの3者はばらばらのものではなく、時代を画する大きな運動として、互いに密接に絡み合いながら影響を与えたのである。この中で、芸術の影響に関しては既に論じているので¹、本稿では、イギリスがイタリアから受けた文学の影響を論じたい。イギリスがイタリアに負うものの中で、最も燦然と光り輝くのは、文学という宝庫であろう。これは、古代から中世をへて近世、現代に至るまで、実に長い道のりになる。

(2) 古代ローマ帝国と中世の物語

イタリアからイギリスの文学に入ってきた古いテーマとしては、紀元前6世紀頃のローマ帝国の「ルクレシアの物語」がある。

ローマの貴族である夫コラティヌスの出陣中に、王子セクストゥスにより凌辱されたために自殺した、貞節な妻ルクレシアの物語は、中世のイギリスの詩人サー・ジョン・ガワー（?1330—?1408）の物語詩『恋する男の告解』（c. 1393作）や、ジョフリー・チョーサー（c. 1340—1400）の『善女列伝』（c. 1385—6作）、ウィリアム・シェイクスピア（1564—1616）の『ルークリスの凌辱』（1594）などの詩や、トーマス・ヘイウッドの『ルークリスの凌辱』（1608）なる劇にも描かれている、伝統的なテーマの1つである。

同様に重要なテーマとして、「トロイルスとクリセイデ」の悲恋物語があ

る。

トロイ戦争でギリシア方に寝返ったトロイの神官カルカスの娘クリセイデは、トロイの王子トロイルスの恋人であったが、トロイ方の捕虜の贖金代わりにギリシア方に売られると、王子との愛を裏切って、ギリシアの将ディオメデースと恋に落ちてしまう。トロイルスはアキレウスに殺され、クリセイデも哀れな死をとげる。

この哀しい物語は、大もとは古代ギリシアの詩人ホメロス(? B.C. 800以前)の『イリアッド』であるが、イギリスの詩人チョーサーは、イタリアの詩人ジョヴァンニ・ボッカーチオ(1313-75)の長詩『恋のとりこ』(c. 1338)を直接のモデルとして『トロイラスとクリセイデ』(c. 1382-5作)なる物語詩を書いたし、シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』(1609)なる悲劇もモデルは同じであると言われる。

シェイクスピアは英文学の最高峰と言われる。彼の戯曲には様々なソースがある事が指摘されてきているが、その1つにプルタルコス(c. 46-c. 120)の『英雄伝』がある。

プルタルコスはギリシアの哲学者、伝記作者ではあるが、アテネでプラトン学派の教育を受けた後ローマに出て、エッセイ集や『英雄伝』などを書く。後者はイギリスでは1579年にサー・トーマス・ノースが英訳して大いに読まれる。シェイクスピアはこれに基づき、『ジュリアス・シーザー』(1599-1600)、『アントニーとクレオパトラ』(1606-7)、『アテネのタイモン』(1607-8)などの史劇の傑作を生み出していくのである。

シェイクスピアは37の戯曲と7篇の詩を残したが、その半分以上がイタリアの物語に依っていたり、イタリアが舞台となっている事に気付く人は少ないかもしれない。

ヴェネツィア²が舞台の『ヴェニス商人』と『オセロー』、ヴェローナが舞台の『ロミオとジュリエット』、『じゃじゃ馬馴らし』、『ヴェローナの2紳士』、ローマが舞台の『タイタス・アンドローニカス』、『ジュリアス・シーザー』、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレイナス』、フィレンツェ

(とフランス)が舞台の『終りよければすべてよし』, シチリアが舞台の『冬の夜ばなし』, ミラノ公プロスペローの登場する『あらし』等々。

彼の7篇の詩の代表作も、ローマ神話に基づく『ヴィーナスとアドーニス』(1592)や、前述のローマのルクレティウスの物語を題材にした『ルークリスの凌辱』(1594)、中世に流行したトロイ戦争の物語を基にした『トロイラスとクレシダ』,そしてルネッサンス期のイタリアの詩人ペトラルカのソネット形式を英語に合う形式に変えた『ソネット集』(1593-6)³など、ローマやイタリア・ルネッサンスと深いかかわりがあるものばかりである。

更に、イタリアのドミニコ会修道士のマテオ・バンデロ (c. 1480-1562)のボッカーチオを模倣した物語を基にしたシェイクスピアの劇には、『ロミオとジュリエット』,『恋の骨折損』,『十二夜』があるし、シンシオことジャンバッティスタ・ジラルディ (1504-73)のやはりボッカーチオの『デカメロン』風の『百物語』を基にしたものには、『十二夜』,『以尺報尺』などがある。その他、ローマの喜劇詩人タイタス・マッキウス・プラウトゥス (c. 254-184 B.C.)の劇が基であると言われる『間違い続き』や、ジョヴァンニ・フィオレンティーノ作の小説集も影響ありと言われる『ヴェニス商人』などもある。

古代ローマの詩人と言えば、黄金時代と呼ばれるアウグストゥス帝時代には、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、ティブールスなどの大作家がいた。

その中でローマの代表的な詩人と言えば、プブリウス・ウェルギリウス・マロ (70-19 B.C.)である。マントゥア近くのアンドスで生れローマ等で学んだこのローマ第1の詩人ウェルギリウスは、後にローマ皇帝アウグストゥスの宮廷詩人となり、ローマの建設者でトロイの英雄アイネイアスの伝説を『アエネイス』(30-19 B.C. 作)なる詩に歌い上げ、ローマ帝国とアウグストゥス帝を称讃したことで、国家的詩人となった。この『アエネイス』は、イギリスのエリザベス朝詩人のサリー伯ヘンリー・ハワードが部分的に英訳するし (1557)、後にジョン・ドライデン (1631-1700)やウィ

リアム・モリス(1834-96)の韻文訳や、古典学者ジョン・コニントン(1825-69)の散文訳など、多数翻訳され、英文学のソースとして好まれていく。特にサー・トーマス・ワイアット(?1503-42)と共にイタリアの詩を研究したサリー伯は、イタリアの「ソネット」なる形式を初めてイギリスの詩に於て確立し、この『アエネイス』の翻訳に於て、英文学史上初めて「無韻詩」なる詩形を用いて、不朽の功績を残した人である。

ウェルギリウスの詩には、この他に、古代ギリシアの詩人ヘシオドス(fl. c. 735 B.C.)の農耕生活と勤労の喜びを歌った教訓詩『労働と日々』を模倣して、農業と労働を讃えた教訓的な詩『農耕』や、ギリシアの詩人テオクリトウス(fl. c. 270 B.C.)の田園詩をまねた『牧歌』(42-37 B.C. 作)などがある。特に後者の『牧歌』の第4編に出てくるメシアの予言のイメージを受けて、ダンテはその『神曲』の中でウェルギリウスを「地獄篇」と「煉獄篇」の道案内としたと考えられている。

イギリスの恋愛詩に影響を与えたローマの詩人の中には、プブリウス・オウィディウス・ナソー(43 B.C.-A.D. 18)がいる。

ローマ皇帝アウグストゥス(27 B.C.-A.D. 14)に追放されてその悲嘆を詠った『哀歌』や『黒海よりの手紙』もさることながら、彼の『恋愛』、『愛の技巧』、『愛の治療法』等の官能的な恋愛詩は、中世のヨーロッパで広く読まれ、いわゆる「宮廷恋愛」の伝統を形成していく。この大きな流れは、イギリスではチョーサー訳の『バラ物語』やエドモンド・スペンサー(?1552-99)、ジョン・ミルトン(1608-74)にまで続いていく事になる。又、ギリシア神話・伝説をまとめたオウィディウスの『転身物語』なる詩は、全ヨーロッパ的な規模で文学や芸術のテーマのソースを提供していく事となる。

このアウグストゥス帝の治世には、上記のウェルギリウスやオウィディウスの他に、アルビウス・ティブルス(c. 55-19 B.C.)のような抒情詩人や、クイントゥス・ホラティウス・フラックス(65-8 B.C.)のような詩人もいた。

特に、ホラティウスの『書簡詩』の中の『詩の技巧』なる詩論は、英文

学史上「アウグストゥス帝時代」と呼ばれる 17-18 世紀の詩人アレキサンダー・ポープ (1688-1744) の『批評論』(1711) に影響を与えたと言われる。

(3) イタリア・ルネッサンスと英文学

イタリア文学の最高峰と言え、ルネッサンス期のダンテ・アリギェーリ (1265-1321) とフランチェスコ・ペトラルカ (1304-74), そして前述のジョヴァンニ・ボッカッチョ (1313-75) であろう。

ボッカッチョが書いたトロイ戦争の物語詩が、イギリスのチョーサーの『トロイラスとクリセイデ』とシェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』の基となった事は既に述べたが、彼の『デカメロン』は又、チョーサーの『カンタベリー物語』(執筆 1387-1400 頃) にヒントを与え、チョーサーは「イギリス詩の父」と呼ばれるに至る。

ダンテは、チョーサーやミルトン、ロマン派の詩人達に影響を与えたと言われる。この中で特に注目したいのは、ロマン派詩人ジョージ・ゴードン・バイロン (1788-1824), パーシー・ビッシュ・シェリー (1792-1822) と、ジョン・キーツ (1795-1812) である。

バイロンは、1815 年にイギリスを去って後、ジュネーヴ、ヴェネツィア、ローマ、ダンテのお墓のあるラヴェンナ、ピサ、ジェノアと移り住むが、この間に代表作の『チャイルド・ハロルドの巡礼』第 3 編 (1816), 第 4 編 (1818) や『タッソーの嘆き』(1817), 『ドン・ジュアン』(1819-24), 『マンフレッド』(1817), 『ダンテの予言』(1821) 等を次々と執筆し、後、ギリシア独立戦争中に戦死した後も、ヨーロッパ大陸のロマン主義運動に多大な影響を残す。

シェリーは、ダンテの『神曲』とペトラルカの『凱旋』に影響を受けて、『現世の凱旋行列』(1824) を書いている。シェリーは、健康のために 1818 年 3 月故国イギリスを去り、フランス、アルプス、イタリアを転々として大作を次々と書き、ピサからヨット「ドン・ジュアン号」でレリチに帰る

と中で嵐にあい溺死するのであるが、その遺体のポケットに入っていたのが、友人キーツの詩集であった。「冬来たりなば、春遠からじ」の一節で有名な彼の詩、「西風に寄せるオード」には、ナポリ近くのバイアの海底に沈んだローマの遺跡の話も出てくる。

キーツの『エンディミオン』の3部構造は、ダンテの『神曲』の「地獄篇」、「煉獄篇」、「天国篇」がモデルであると言われるし、彼はイタリアの古い物語を基に『イザベラ』とか『聖アグネス祭前夜』等の詩も書いている。⁴ これらの物語は後に、イギリスのラファエロ前派の画家達が絵に描いていく事となる。ローマで客死したキーツを悼んで、シェリーは『アドネイス』なる詩を書いた。

人文主義者としてのペトラルカについては別に触れる事として、詩人としてのペトラルカは、チョーサーやエリザベス朝の詩人達に、計り知れない影響を与えた。

チョーサーはイタリアを旅行中にフィレンツェを訪れ、ボッカーチオとペトラルカが活躍するイタリア・ルネッサンスに触れている。ダンテの恋人ベアトリーチェにも比するペトラルカの恋人ラウラに寄せるプラトニックな愛は、彼のイタリア語の詩集『カンツォニエーレ』(1470)に収められている。

この恋愛詩の中の1形式であったソネット形式を、まずサー・トーマス・ワイアット (?1503-42) がイギリスの詩に初めて取入れ、次いでサリー伯ヘンリー・ハワード (?1517-47) がこの形式を確立する。そしてその流れは、エドモンド・スペンサー (?1522-99) の『アモレッティ』(1595) や、その友人サー・フィリップ・シドニー (1554-86) の『アストロフェルとステラ』(1591)⁵、サミュエル・ダニエル (?1563-1619) の『ディライア』(1592)⁶、マイケル・ドレイトン(1563-1631)の『アイディア』(1593)⁷ 及び『アイディアの鏡』(1594)、ジョン・ダン (1572-1631) の『諷刺詩、哀歌、歌とソネット』(?1592-8執筆)⁸ など、イギリス・ルネッサンスの詩人達を総なめにしていく。

そしてロマン派詩人キーツは、このペトラルカ流のソネット形式とシェイクスピア流のソネット形式とをミックスして、彼独特のオードの形式を傑作として世に残し⁹、この流れは、ラファエロ前派のダンテ・ゲイブリエル・ロゼッティなどの詩人達に受け継がれていく。

自ら雑誌を次々と編集して、バイロンやシェリー、キーツ等のロマン派の詩人や、チャールズ・ラム(1775-1834)やウィリアム・ハズリット(1778-1830)などの評論家や随筆家の作品を発表する機会を提供して彼らを大いに保護した詩人・批評家に、ジェイムズ・ヘンリー・リー・ハント(1784-1859)がいる。

彼は1822年にイタリアを旅行するが、シェリーは亡くなり、バイロンにも失望する。彼の長詩『リミニ物語』(1816)は、13世紀イタリアに起こったパオロとフランチェスカの不義の恋の物語を基に書かれているし、『ヒーローとリアンダー』(1819)なる詩も、オウィディウスも書いた哀しい恋の物語であり、又『フローレンスの伝説』(1840)なるフィレンツェに関する劇もある。

この他にイタリアの詩人で英文学に影響を与えた人となると、バイロンやシェリー(そしてゲーテ)にまで影響を与えた、ソレント生れのトルクァート・タッソー(1544-95)がいる。

彼は、フェラーラ公爵アルフォンソ2世の妹レオノラに対する思いをソネットに残しているし、彼の悲劇『トリスモンド』(1587)は、バイロンの『タッソーの嘆き』(1817)を、そしてついでながらゲーテの『トルクァート・タッソー』(1789)を生む事となる。

更に、ジャンバッティスタ・マリノ(あるいはマリニ)(1569-1625)は、その『アドネー』(1623)なる長編叙事詩によって、後に「マリニズム」と呼ばれる奇抜で誇張された技巧に富む独特の詩風を広め、スペインの「ゴンゴリズム」と並んで17世紀のヨーロッパの文学を代表する事となる。

イギリスの形而上詩人、例えばジョン・ダン(1572-1631)やジョージ・ハーバート(1593-1633)等はもちろんその影響を受ける。そして特にリ

チャード・クラショー (?1613-49) は、ローマの枢機卿パロットの秘書となった事もあり、1649年からロレトの教会の副聖堂参事会会員となるが、その『神殿に至る階段』(1646)には、上述のマリノの影響があると言われる。

同様にイギリスのカトリック詩人であったロバート・サウスウェル(1561-95)は、大陸で学んだ後ローマでイエズス会に入り、帰国後捕えられて監禁、拷問の末に絞刑にされるのであるが、彼も上記の形而上詩人達に深い影響を与えている。

イギリスの文人達は、大陸で遊学する伝統があるが、サー・ジョン・サッキング(1609-41)もその例外ではない。彼はやはりイタリアも訪れ、後チャールズ1世の宮廷で花形となった詩人・劇作家である。

(4) 19世紀以降の英文学とイタリア

ヴィクトリア朝の詩人アルフレッド・テニスン(1809-92)は、1851年にイタリアに旅行し、後、「リュークリース」(1868)などのイタリア的テーマも詩に描いてはいるが、全体として言えば、ごくイギリス的な詩を描いたと言えよう。

しかし、同時代のロバート・ブラウニング(1812-89)はバイロンやシェリーを愛し、ルネッサンスの時代のイタリアに関する詩を多数書いている。その代表作は、『男と女』(1855)や『指輪と本』(1868-9)であろう。彼は1846年からフィレンツェに住み、ヴェネツィアで客死している。

バイロンとシェリーの伝記に基づいて、ベンジャミン・ディズレーリ(1804-81)は、『ヴェニス』(1837)なる小説を書いている。

そして先のブラウニングは、1815年以降イタリアに住んでフィレンツェで客死したイギリスの詩人ウォルター・サヴィージ・ランダー(1775-1864)の影響を受けた事を自ら認めているし、ランダーは又、チャールズ・ディケンズ(1812-70)の小説『淋しい家』(1852-3)に登場するかんしゃく持ちのボイソンのモデルであると言われている。ついでながら、ディケンズは1844-5年にイタリアを旅行しており、『イタリアからの手紙』

(1846) なる紀行文を発表している。

19世紀のイギリスでは、文芸、美術批評が盛んになる。

ジョン・ラスキン (1819-1900) は、ロンドン大学キングズ・コレッジで文学や絵画を学び、更にオックスフォード大学を卒業した。(これらの大学は1989-1990年に筆者が留学したところでもある。) 彼は現代の絵画、とくにターナーを弁護する評論を出した後1846年に北イタリアを訪れ、とくにヴェネツィアの絵画・彫刻・建築を調査して建築論を出版し、以後講演に於て、ラファエロ前派やターナーなどの弁護を展開していく。

マシュー・アーノルド (1822-88) の評論には、フランスに関するものはあるが、イタリアの影が見えるものはわずかかもしれない。

しかし、ウォールター・ホレイシオ・ペイター (1839-94) は、ラファエロ前派とも親交があつて、イタリアには縁が深いと言える。評論『ルネッサンスの歴史研究』(1873)には、彼の唯美主義が見えるし、小説『快樂主義者マリウス』(1885)は古代ローマ帝国の時代が舞台である。ルネッサンス研究の流れは、『プラトンとプラトン主義』(1893)の中に辿れるし、小説『ラトゥールのガストン』(1896)は、シャルル9世の時代のフランスが舞台でも、中には、モンテーニュ、ロンサール、そしてかのイタリア・ルネッサンス期の思想家ジョルダノー・ブルーノ (1548-1600) が登場する。

ヴィクトリア朝の詩人・文芸批評家には、アルジャノン・チャールズ・スウィンバーン (1837-1909) もいる。彼はイートン卒業後独学で英文学、フランス語、イタリア語等を学び、1857年にはイタリアを訪れ、当地の愛国者・文芸批評家のジュゼッペ・マッツイーニ (1805-72) に寄せた詩を書いている。後、イタリア・ルネッサンスに魅せられたラファエロ前派のダンテ・ゲイブリエル・ロゼッティ等と親交を持ち、1867年には『イタリアの歌』も出版する。1885年には、バイロンの史劇『マリーノ・ファリエロ』(1820)と同名のヴェネツィア共和国総督ファリエロの悲劇を出版している。

この時代イギリスではイタリア・ルネッサンスの歴史的研究が盛んとなった。中でも、ジョン・アディントン・シモンズ (1840-93) はイタリ

ア・ルネッサンスを一大文化史と捕え、当時の社会、政治、学芸、美術、文学、宗教などという様々な角度からこれを研究し、大著『イタリアのルネッサンス』（1875-86）を出版する。彼のダンテやシェリー、シドニー、ベン・ジョンソン、ミケランジェロに関する評伝は、近代印象主義的批評の先駆と言われる。彼はかのルネッサンスの巨匠ミケランジェロ・ブオナロッチェ（1475-1564）やトマソー・カンパネーラ（1568-1639）のソネットも翻訳している。

古代ギリシアやローマの神話や伝説にテーマをとったイギリスの劇作家には、ジョージ・バーナード・ショー（1856-1950）もいる。彼はシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』や『アントニーとクレオパトラ』に張り合って、新しい眼で見た『シーザーとクレオパトラ』（1898）を書いているし、2世紀のローマのライオンの恩返し伝説に基づいて『アンドロクレスとライオン』（1912）も発表している。更に有名なのは、『ピグマリオン』（1913）であろう。古代ギリシア神話にあるキプロス王で彫刻家のピグマリオンとその恋人となる彫像ガラテアの伝説を、イギリスの音声学教授ヘンリー・ヒギンズと花売り娘リザの物語に変えたものである。これは20世紀には、『マイ・フェア・レディ』なるミュージカルに映画化されている。

アイルランドの小説家ジェームズ・オーガスティン・ジョイス（1882-1941）はカトリックで、20世紀初めに大陸を旅行し、パリやポーラ、トリエステ、チューリヒ等を訪れている。その小説『ユリシーズ』（1922）は、ギリシアのオデュッセウスの物語が基となっているし、『フィネガンの目覚め』（1939）には、イタリアの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ（1668-1744）の思想が影響を与えたと言われるし、この中には同じくイタリアの哲学者ジョルダノ・ブルーノも登場する。

小説家・詩人のジュージ・メレディス（1828-1909）は、ドイツやフランス、スイスを旅行したが、1866年には『モーニング・ポスト』誌の通信員として、オーストリアと戦争中のイタリアに赴任する。その前には、小説『イギリスのエミーリア』（後の『サンドラ・ベローニ』）（1864）を出版

し、後、その続編として『ヴィットーリア』(1867)を出版する。前者はロンドンが舞台で、イタリア人の娘エミーリア・サンドラ・ベローニが主人公、後者ではエミーリアはヴィットーリアと改名し、舞台はイタリア独立戦争(1848-9)となる。

D.H. ロレンス(1885-1930)の『チャタレイ夫人の恋人』を知らない人はいないと思う。これはそもそも1928年にイタリアのフィレンツェで出版された。彼は大学での恩師の夫人フリーダと恋に落ちて、1912年に故国イギリスを去り、ドイツ、イタリアを転々とするのだが、その頃の愛は詩集(1917)にまとめられているし、紀行・評論文『イタリアの薄明』(1916)や『エトルリアの故地』(1932)などもある。このヨーロッパ大陸滞在中に代表作『息子と恋人達』(1913)を完成し、『虹』(1915)に着手している。原始生活謳歌とも言えるロレンス独特の性の哲学と官能描写は、イタリアの影響を抜きにして考えられるものだろうか。

イタリアに魅せられた作家にはアメリカ人もいる。ヘンリー・ジェイムズ(1843-1916)という小説家・批評家である。彼は1869年から1907年まで、(特に画家のホイッスラーやサージャントがいた1881年以降)ヴェネツィアを何度となく訪問し、『アスパーンの書類』(1888)や『鳩の翼』(1902)なる小説や、『イタリアの日々』(1909)なる旅行記やエッセイ集、手紙の中にこの町を描いた。彼は1915年にイギリスに帰化しているので、彼の希望にそい、イギリス人の中に加えても差しつかえないものと考えられる。

(5) おわりに

以上のように、芸術のみならず文学の領域に於ても、イギリスはイタリアに多大なものを負っている。その過程は、古代ローマ帝国に始まりイタリア・ルネッサンスをへて現代にまで至る長い道のりである。個別の議論は、注にあるように、既にこれまでに論じてきているものもあるので、参考にして頂きたい。

注

- 1 Cf. 拙論「イギリスとイタリア — 芸術の影響」、『リベラル・アーツ』, 第9号 (札幌大学教養部, 1994)。
- 2 固有名詞は全て原語から直接にカタカナに訳してある。従って地名の場合「ヴェニス」ではなく「ヴェネツィア」とイタリア語のまま書く事とする。ただし英語の作品の場合は英語のまま「ヴェニス」と訳す。以下同じ。
- 3 Cf. 拙論「Elizabeth 朝詩人と形而上詩人のイメージの比較 — Spenser, Shakespeare, Donne を中心に」, 東北学院大学大学院文学研究科論集『東北』, (昭和49年), 第9号。
- 4 Cf. 拙論「Mortal Beauty in Keats' Odes」, 『札幌大学教養部紀要』, (平成6年), 第44号。
- 5 Cf. 拙論「Sir Philip Sidney: *Astrophel and Stella* 試論」, 『札幌大学教養部紀要』, (昭和54年), 第14号。
「Sidney と Donne — Donne's Library 及び伝記の側面から」, 『北海道英語英文学』, (昭和56年), 第26号。
「Sidney 訳 *Psalms* に於ける新たな試み」, 『札幌大学教養部紀要』, (昭和60年), 第25号。
「Sidney の *Psalms* と *Defence*」, 『北海道英語英文学』, (昭和62年), 第32号。
- 6 Cf. 拙論「Daniel, *Delia* — Petrarchan tradition の観点から」, 『札幌大学教養部紀要』, (昭和51年), 第9号。
- 7 Cf. 拙論「Drayton, *Idea* — その加筆修正をめぐって」, 『東北』, (昭和50年), 第10号。
「Drayton のソネットの変質」, 『札幌大学教養部紀要』, (昭和51年), 第8号。
「*Amours* より *Idea* へ — Drayton の形而上詩人への変貌」, 『十七世紀英文学研究Ⅳ — 王政復古の詩人達』, 金星堂, (昭和57年)。
- 8 Cf. 拙論「Sidney から Donne へ — 恋愛詩の theme と style」, 『コウルリッジとその周辺』, 法政大学出版局, (昭和57年)。
「Donne の 'La Corona」, 『札幌大学教養部紀要』, (平成3年), 第38号。
「Donne の 'La Corona' と Sidney」, 『北海道英語英文学』, (平成3年), 第36号。
「Donne の 'Lamentations of Jeremy」, 日本英文学会第65回大会口頭発表 (平成5年5月), (於 東京大学本郷キャンパス)。
- 9 Cf. 拙論「Keats に於ける永遠の美」, 『大学連絡協議会第4回学術講演会および研究発表会報告』, (昭和46年)。
「Keats の美の概念」, 『東北』, (昭和46年), 第6号。
「Keats の初期の詩の Style」, 『東北』, (昭和47年), 第7号。
「ワーズワースのソネット構造」, 『東北』, (昭和48年), 第8号。

イギリスとイタリア — 文学の影響

「A Study of John Keats: With Special Reference to His Poetic Style-I」,
札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』, (昭和50年), 第9号。

「A Study of John Keats: With Special Reference to His Poetic Style-II」,
『札幌大学教養部紀要』, (昭和52年), 第10号。